

## 始源への遡行と現在への回帰

辻本佳『Field Pray #2 擬態と遡行』

奥田浩貴

本作は演者の故郷でもある紀州熊野によるフィールドワークから生まれた作品『Field Pray #1 どうすれば美しい運動が生まれるのか。』の二作目にあたり、舞台には自然物の遺骸としての流木が配され、その中でダンスが舞われる。電車が通る高架下の音、車の通り過ぎる音、小川の湾（せせらぎ）の音、草の戦（そよ）ぐ音等が、会場の中で不明瞭に混じり合っている。タイトルにある‘Field’は、自然の中の区域を表す訳ではない。川の上流へ、時間としての原初へ向かう様にダンスは進行する。

舞台は流木を移動するための凜とした歩行から始まる。その後続く作舞全体に共通しているのが、直立で機械的な動きがなく、半獣神パーンの膝を想起させる屈曲した身体を伺うことができる点である。身体を痙攣させ脱皮をする、一つの擬態を払うかの様な作舞が展開する。大きな流木の下に怯え隠れる存在への擬態、その上で飛び跳ね遊戯する存在への擬態へ。コントラバスを持ち上げる様に、流木を右肩に担いで舞台を下手から上手へ移動する姿は、重たい顔を頂く牛頭 馬頭を想い起こさせる。様々な擬態をみせたダンスは、エロス・タナトスを混合させたものへと進展する。両脚に細長い流木を挟み男根を象徴させるダンスが続き、演者を左右から照らしていた照明は消え、頭上からのスポットライトに切り替わる。そこでは、僅かに注ぐ月明かりが狂気を引き起こしたかの様に、自らを暴力に苛むのである。右胸、左胸、腹を自らの拳で殴る音が、会場に虚しく響く。

終盤には、流木は暗闇の中に消え去り、絞られた青白く揺らめくスポットライトは陰影を伴いながら劇的に舞台を照らす。地下水を潜り抜けて深海にまで達したかの様に、演者は身体を丸め静かに悶える。途中で観客席後方ミキサース卓の位置から小さな黄色いライトの点滅があり、観客の舞台への没入を引き離してしまう。或いは演者に対する警「光」とも捉えられる。会場の光と音を司る中枢からの点滅は意味に富む。近代以降発展してきた照明・音響の技術=理知の表象が、水の底に還る自然の胎児に対して、現代に回帰させる構成となっている。

擬態を繰り返しながら始源に遡るダンスについて、時系列順に追ってきた。変身譚に関する物語は、オウィディウスの『変身物語』や、フランツ・カフカの『変身』に至るまで、世界各地で民間伝承、神話、小説、戯曲等にも表されてきた。metamorphosis とも異なる mimic を繰り返したのは本作の場合、序列を抱えた退行ではなく遡行なのである。原初の人間の驚嘆に端を発する、あらゆる植物を毎年再生させる大地への地母神信仰、すなわち母性への信仰は古来各地で散見されることであろう。海を母性の象徴として捉えるのも同様であり、多くの言語の語源からも、科学的な意味での「生命の羊水」という表現からも確認できる。本作では、始源=生の根源への遡行 (=ミメーシス) による胎内復帰という再生願望をも内包しつつ、意識というスポットライトに照らされた「現」在に回帰する。“#1”で一度完結した‘Field Pray’は再び開かれ、祈りは持続していくことであろう。

(1247 字)